

薬草園から生薬を学ぶ

薬局・薬店では漢方薬や生薬を成分とした医薬品を販売する機会が多い。毎日のように手にする医薬品に含まれる原料の一つである薬用植物は、どのように栽培され、医薬品になっているのだろうか。全国に約90カ所あるとされる薬用植物園を訪ね、薬用植物について伺った。
(総務室・広報委員会)

第3回

毒草などの注意喚起で公衆衛生を守る 北海道立衛生研究所薬用植物園

北海道の公衆衛生の 中核施設

1876年(明治9年)に札幌農学校として開学した北海道大学は、北海道の教育の中核を担う教育機関としてだけでなく、歴史を感じさせる校舎やイチョウ並木などが札幌市の観光スポットの一つにもなっている。その北海道大学のキャンパスに隣接する北海道立衛生研究所は1949年(昭和24年)の設立以来、北海道の公衆衛生に関する中核施設として、試験検査、調査研究、研修指導などを行ってきた。飲料水、食品などの安全性評価や放射性物質の測定、細菌やウイルスなどの分析、感染症対策などその役割は幅広い。特にキタキツネがおもな感染源とされるエキノコックス症の研究は国際的にも知られている。この研究所の一角に薬用植物園がある。



北海道大学の北側にある北海道立衛生研究所

研究と薬用植物育成の 両輪で

「衛生研究所は北海道が設置した保健福祉部の出先機関であるため、衛生研究所の薬用植物園と大学内にある薬用植物園は役割が少し違います」と話すのは、北海道立衛生研究所生活科学部薬品安全グループで主査(医薬品)を務める高橋正幸さんだ。高橋さんは薬剤師として薬局に勤めた後、研究員として北海道立衛生研究所に入所。薬品安全グループにて、医薬品や医療機器、食中毒などに関する調査研究、北海道特有のシラカバを中心とした花粉の飛散情報の提供、大麻や危険ドラッグなどの検査などに携わりながら、薬用植物園の管理・維持に努めている。「大学生だったときに生薬について学んだはずでしたがほぼ覚えていなかったため、私自身も薬用植物園に来てから勉強したことも多



薬用植物園を管理する北海道立衛生研究所主査の高橋正幸さん(左)と佐藤耀さん(右)

いです」と笑顔を見せる。

薬用植物園では月2回のペースで一般向けの公開日を設けている。1回につき約2時間という限られた公開時間だが、植物好きが足を運ぶ。薬学部の学生だけでなく町内会など団体からの希望があれば、ガイド役を務めながら見学を受け入れたり、保健所など衛生職従事者向けの研修を実施することもあるそうだ。

毒草の周知に尽力

薬用植物園の敷地は約3,000平方メートル。ネコやキツネの姿を見かけることもあるという広々とした敷地内では、薬用植物を中心に約750種類の植物を栽培している。標本園や樹木園、温室、水生植物コーナー等で構成された園内には、通常の説明板のほか、一部の植物には北海道らしくアイヌの方々の植物利活用方法を記載した説明板を設置している。「アイヌの人たちがこの植物の根の部分で腹痛の際に煎じて飲んだことなどを伝えていくことも大切」とし、アイヌ語も用いた説明板で情報提供に努めている。

特に力を入れているのが毒草の周知だ。北海道では4~5月に山菜採りが盛んに行われていることから、毒草を誤って食べたことによる食中毒が起きることも少なくない。



約3,000平方メートルの園内に約750種類の植物がある

そのため春先には「春の山菜展」というイベントを行っている。山菜採りに出かける前に毒草について学ぶことを目的に来園する人も多く、スイセンとニラ、トリカブトとニリンソウなど、北海道の春に見られる毒草を類似する植物と比較しながら、食べられる山菜の見分け方のポイントを詳しく紹介している。

食中毒の事例のなかでも、よく見られるのがトリカブトだ。葉の形がヨモギやニリンソウにも似ているが、「ヨモギには草餅のような匂いがあるので、匂いをかいてもらうと判断しやすいのですが、その違いを知っていないと見分けるのは難しいです」と説明する。最近では食べられる野草を紹介するテレビ番組なども見られるが、写真や薬草図鑑などで確認しただけ、見聞きしただけでは判断しにくいのが毒草の難しさだ。「観賞用の植物とは違い、薬用植物は花が咲いたり実がついたりするのは短い期間です。だから余計に判断しにくいです。正しい知識をもっていないと食中毒につながるので、まずは実物を見て知識を得てほしい。植物の実態を知ってもらうために当園を利用してほしいです」と高橋さんは話す。

見て触れることを大切に

薬用植物園では、北海道が作成した毒草の特徴を写真付きで紹介する『毒草ハンドブック』を配布している。細かい説明がなされているもののそれだけでは不十分ということで、薬用植物園では似ている植物をあえて同じエリアに植えて、自然環境のなかで毒草がどのように見えるのかを疑似展示している。人の手が介在しない自然のなかでは、食べられる植物と毒草と一緒に生えていてもおかしくない。見た目が似ている葉と葉が隣同士で育っていたらどのように見えるのかを視覚的に理解してもらうなど工夫することで、毒草の発見につなげている。「当園では植物を触ったり、葉をちぎって匂いを嗅いでもらっています。毒草のなかには匂いに特徴をもつものがあるので、実際に嗅いでもらうのが一番わかりやすいのです」と高橋さん。

例えば北海道民が大好きだというギョウジャニンニクは、強烈なニンニク臭を発する。対してギョウジャニンニクに葉の形がよく似ている毒草のイヌサフランには、ニンニク臭がない。毒草かどうかを見極めるには匂いが重要なポイントになるため、来園者には「写真を見ているだけではわから

ないことが多分にあります。葉をちぎってどンドン匂いをかいでください」と伝えている。毒草を食べてしまったら食中毒を起こすが、少し触った程度では食中毒にはならない。触った後にしっかり手を洗えば問題ないと、来園者に伝えている。ほかの植物園では禁止されていることが多い植物にじかに触れることを、薬用植物園では大切にしている。

試験栽培などにも積極的に

この薬用植物園は北海道の出先機関であるため、道が主導する施策に沿った運営がベースにある。高橋さんは、調査研究など主軸となる役割があるとしながらも「昨今では漢方の使用量も増加傾向にあると聞いていますが、生薬は販売価格が高額になったり、そもそも輸入が制限されるなどといったリスクもあるため国産生薬の必要性が高まっています。国産生薬の品質を担保することがより重要になってくると思うので、試験栽培などで協力できる場所があれば積極的にやりたいと思っています」と締めくくった。

(聞き手 広報委員長 斉藤亜貴子)



毒草についても詳しく説明している



『毒草ハンドブック』(左)と『北海道の代表的な薬用植物』(右)を配布